

町民文芸



只見短歌会

十一月詠草

大塚栄一 指導

洗ふほど白際立つと子が言へばてんじく天然もめでまた敷布縫ふ

皆川 恒子

冬囲ひに今年最後の里帰りし来し方偲びひと夜眠れず

吉津 政枝

流れ込む落葉に堀の水溢れ物干す筵急ぎ引き摺る

目黒 富子

歌会終へ姪の車で紅葉の山々見つつ歌の師送る

五十嵐 英子

異状気象案じつつ来て豊作を喜び合へど米価下落す

渡部 ゆき子

十九年七か月にて知恵遅き子と広報紙配りを止めし

五十嵐 夏美

落葉踏み山より下り来し羚羊は声を上げたる我に振り向く

馬場 八智

水溜りし膝の痛みは癒えずして師走の部屋を膝擦りてゆく

古川 英子

逝きし人話題にすれば次つぎに知りたる顔の浮かびくるなり

齊藤 ちひろ

雪降るを気遣ひ大根採り置けば暖かくして早萎びゆく

渡部 ヨリ子

粗大ごみにいよよなりしか老い夫と娘の掃除避けつつ笑ふ

新国 洋子

(出詠順)

只見俳句会

十二月例会

目黒十一 指導

大根煮る減塩醤油油棚の上

一穂

落葉して句碑の見え来し蚶満寺

敦子

牛蒡掘る空に鳶舞う影二つ

父の忌や三日つづきの冬日和

礼

色鳥にくるりと背中むけられし

冬瓜の青ごろごろと山眠る

修一

母折りし鶴を並べて冬の暮

冬川の日向日影と流れ行く

一灯

池普請鯉の数など定まらず

鶏頭の種取る妻の手のくぼみ

邦男

三猿の庚申塚や冬木立

委託する除雪費用の算段に

又壺歩

懸命に懸命に生き歳の暮

川岸に佇む鷺や冬茜

峽にまた更地増えけり冬満月

吉児

冬日亨け齧む牛のみみげ透け

隆堂

新蕎麦や帯戸座敷に漆塗り膳

子の家が終の住居と年の暮

笑羊

野生色留めておりし熊の肉

具だくさんの味噌汁椀や冬に入る

康女

菊摘んで菊の色香に包まれり

暖かき枯葉の道を走りけり

リウコ

木の葉散る小瀧や光る水しぶき

一片の落葉残らず掃しき庭

恒夫

野良猫の腰を低くめる年の暮

逃げることなど許されず煤払う

洋子

行進曲口づさみつつ年の暮

鷺ひよろり強風の吹く兆あり